

新・静岡県立総合行政図書館(企画案)

☆コンパクト総合行政での需要創出・人材育成型公共図書館

第1の集約・統合(首長部局住民直接サービス部門) (地域住民直接サービス部門) ・子育て支援事業 ・医療サービス事業 ・介護相談事業 ・福祉サービス相談事業 ・地域中小企業支援事業 ・起業創生事業 ・商工サービス事業 ・新規農業者支援事業等	図書館内に2部屋◇ 2部屋×6日◇12 サービス事業◇毎週 定例により◇見える 化を図る※午前と午 後に分ければ1部屋 で可能。	第2の吸収・統合(公民館部門) ・研修室(2部屋) ・小ホール(1ホール) ※その他は縮小	公民館の利用頻度が低いので、最小限度の部屋数での吸収・統合とし、部屋の利用頻度を最大限にアップを図る。
「核」に 旧来の読書・学習の図書館を ★県民贈図書コーナー ★企業等寄贈図書コーナー ※情報ナビゲーター司書 ★県内郷土資料コーナー ★児童教育コーナー ※地域コーディネーター司書 ※企画プロデューサー司書	※第1は定例化での案内表示。(見える化サービス) ※事業担当は当日の時間帯のみ本庁等から。 ※行政各分野を見える化で日常的サービスにする。	第3の集約・統合(美術館・歴史資料館等) ・歴史資料展示 ・絵画展示 ・文学資料展示 ・民族資料展示 ・彫刻展示 ・写真展示 ・書道展示 上記等対応	※県内公民館の利用頻度で規模修正。 ※課題解決・地域連携事業は県民住民と共に ※人材発掘、人材育成での県内自治での活性化へ
一般閲覧室内での常設展示ケース併設で対応する展示排架方式。(ギャラリー・資料館・古文書館等融合直接サービス)	第4の集約・統合(県民交流部門) ・県民カフェ ・ディスプレイションコーナー ・地域創生プロジェクトコーナー フリースペースでの間仕切りパネル方式	※遊びながら学習 ※型に束縛されない県民交流・住民交流 ※余暇時間使用の自由な空間スペース ※公共図書館版ラーニングコモンズ	※県民交流・住民交流 ※余暇時間使用の自由な空間スペース ※公共図書館版ラーニングコモンズ

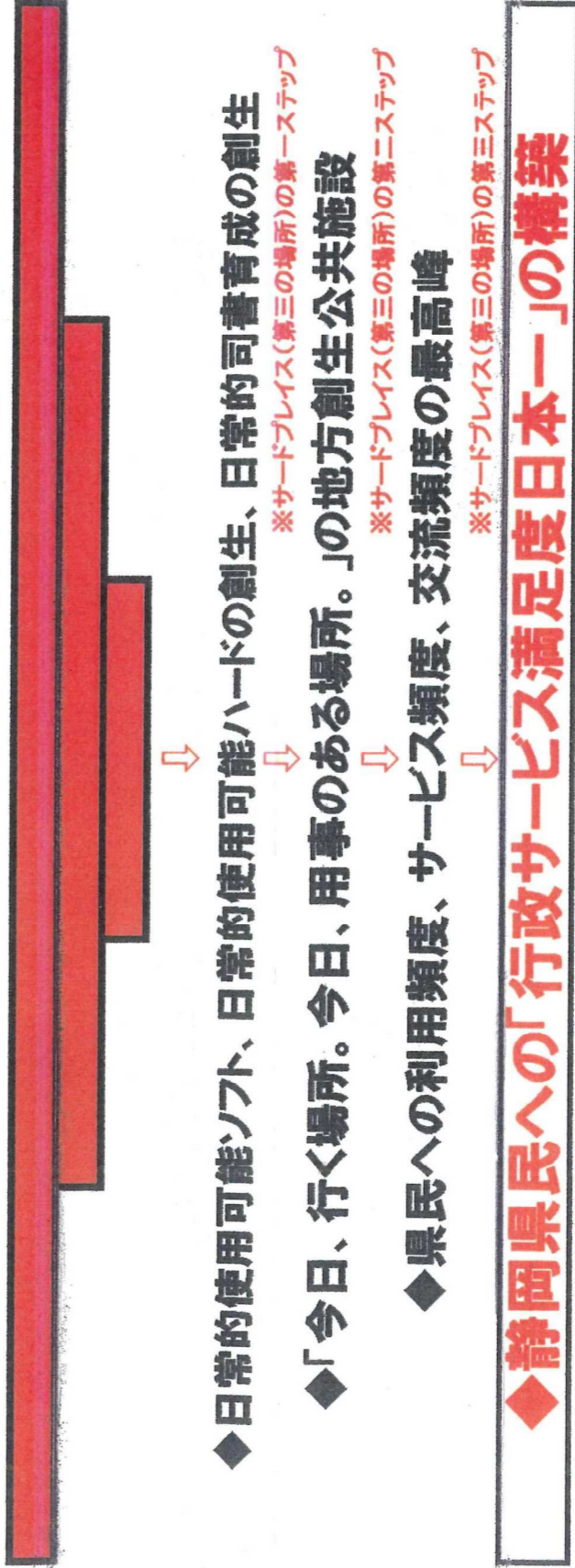
※企画展示は地域の団体、サークルとの協働事業
 ※団体、サークル調整は地域コーディネーター司書
 ※企画展示事業はプロデューサー司書

※情報(本・雑誌等)の融合化での芸術・文化の日常化

(県立エリアの人口・利用頻度に合わせ面積確保)

※費用対効果を最重視。

※(司書の再生・スキルアップ) → (資料収集整理司書・旧来業務) → (情報ナビゲーター司書・旧来業務) → (地域コーディネーター司書・課題解決・地域連携業務) → (企画プロデューサー司書・芸術文化歴史連携イベント業務) → 図書館行政のスペシャリスト



(補足説明)

- ・生涯学習の理念はすべての行政分野及び人生を包摂する。よって、すべての行政サービス融合を政策・施策で「見える化」しました。
- ・旧来の守りの社会教育内での形骸化した図書館像(王道)から脱却。正道としての攻めの総合行政分野での公共図書館像としました。
- ・多機能融合型図書館は図書館の中に他の行政分野の機能・サービスを融合するものであり、近年のエリアで別れた複合型図書館とは違う。

時間を基準にした、電子書籍の価格の計算方法の提案

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

漫画の違法コピーの不正が後を絶たず、議論されている。本全般のコピーも同じことであるので図書館で、電子データ化された本(以下、電子書籍という)が、より普通のものとして、扱われるようになったときネット等での違法コピーの入手のほうが簡単だとすると図書館や著者(すべての利害関係者)が、一般の方から見向きもされないのではないか。そんな危惧から、とにかくお金を、より万人に受け入れられるようなかたちで、還元させるための提案である。

アイデア

本の著者、出版社など利害関係者は多いだろうが次のように考えてもらえないだろうか。紙の本の価格の設定はこれまでと変わりなし。電子書籍の貸し出しではかかった貸し出し期間に比例して価格を定め図書館の側が利害関係者のほうへ代金を支払うというものである。(支払うのは図書館だけでなく、教育関係者など多岐にわたってよいはずである。)例えば、紙の本Cが1冊2000円だったらその2000円がどれくらいの期間、価値があるものかを当事者すべてに考えてもらう。仮に10年と答えがでたとする。以下ではこれを"有効期間"と呼ぶ。すると1年あたりの電子書籍の価値は200円となる。

$$(2000 \text{ [円]} / 10 \text{ [年]}) = 200 \text{ [円/年]}$$

電子書籍を貸し出した全ての方の

貸し出し期間が現時点まで合計3.5年だったら

$$200 \text{ [円/年]} \times 3.5 \text{ [年]} = 700 \text{ [円]}$$

を図書館の側が支払う。

とある貸し出し先の1つで、電子書籍Cについての貸出期間が"有効期間"10年を越えたら、紙の本の価格2000円より多くは図書館は支払わないとする。(次回から計算に含めない。)前回支払いから今回支払いまでの期間分を再度支払う。以降、集計と支払いを繰り返していくというものである。仮に本の価値が永久的なものと合意される場合は短期間ではその電子書籍の価値を読者が享受することはできないと考えてもって、1年あたりの価値は安くなると了承してもらう。出版社などの側は、電子書籍の価値が長く続かないとして電子書籍の1年あたりの価値を高くしようとするかもしれないがあからさまな場合は、そんな電子書籍は購入しなればいけないのである。短期間で価値が減る本は図書館にはふさわしくない。より複雑な場合として、次のようにも考えられる。

1. マーケティングの製品ライフサイクルというファッドのように販売が開始されてすぐ価値が減ってしまうもの。

(縦軸は売上高でなく"電子書籍の単位時間あたりの価値"という曖昧なものにしている)

語弊を恐れずに言えば、インタメ型のものである。(そういうものが良いという価値観ももちろんありうる。)

横軸の時間に沿って積分して支払い額を決める。(図1を参照)

2. 専門書のように理解に時間がかかるが、理解すると価値が大きいもの。(図2を参照)

3. 他にも自由に考えられる。

利害関係者はお金を求めるのか? 名著と言われるなどの名誉を求めるのか? という疑問もあるにはある。

積分で価格を求める複雑な場合の例

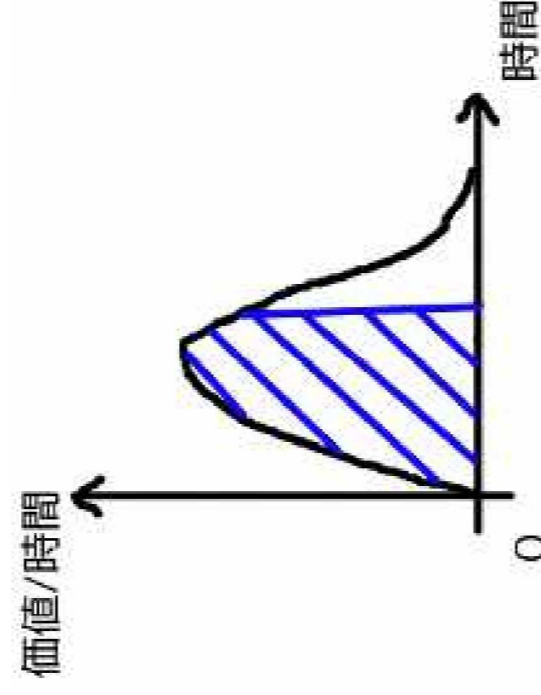


図1 インタメ型の価値

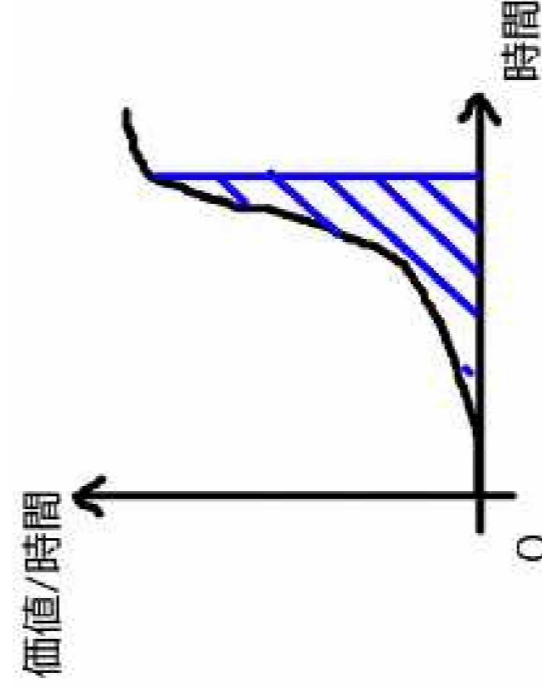


図2 専門書の価値

図書館での本の売買と"付随するデータの売買"

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

図書館で、利用者が(この本ほしい。)と思ったら、すぐ買えると便利である。現在では、スマホ1台あれば実現できるではないか、という反応がありそうである。スマホより速い方法はないかと考えた。図書館のカードに、個人情報とくに届け先住所、コンビニ受け取り、支払い方法などを記録しておく。「これ買うほうでお願いします。(本を渡す)届け先はこれで。(カードを渡す)支払いは今します。(お金の精算)(現金以外も考えられる)」速い。(もっと便利なものもありえるかもしれない。)(スマホに何でも頼るより、分散したほうがいいという考えもある。)(考えてみると、図書館と書店の違いは曖昧なものになってゆくのかもしれない。ここで、図書館が新しい図書館たりえる、図書館にしかできないことを提案したい。

アイデア

"本に付随するデータ"を、返却時に、本と一緒に、図書館に残せるようにする。本は紙のものでも、電子データ化されたものでもよい。"付随するデータ"とは、例えば、学校で課題として出されたレポートに対して自分自身で書き上げたレポートのコピーである。他者が、他人のレポートの回答を参考にするのは、教育的に良くないというのであれば、問題とヒントだけでもよい。ヒントを提供することが、教育的にはギリギリであろうか。とにかく、図書館に本と"本に付随するデータ"を蓄積、活用するという提案である。逆転の発想で、利用者が図書館に本を貸し出すことがあってもいいのではないか。利用者や図書館、書店、ネット通販、中古ショップのどこでも貸し借り、売買のどれかだけでもできないと制限することはあまり意味がないと考える。特徴は曖昧になってゆくのではないか。以下では、図書館についてだけ書く。本を、借りるとき、また、買うとき、"付随するデータ"も借りられるようにする。また、買えるようにする。本を、返却するとき、また、売るとき、"付随するデータ"も図書館に残せるようにする。また、売れるようにする。一般に、問題は、解くより作るほうが難しい、楽しいと言われている。1冊の本をきっかけにして、人間関係が(コミュニティというのかよく分からんが)つくられるようだと理想的である。その関係づくりのための、"本に付随するデータの貸し借り、売買"である。ところで、六次の隔たりと呼ばれるものがある。本で、良き先輩方とつながりをつくれるとしたら(真面目な本で、真面目なコネをつくるのである)本を読んで、自分自身だけの感慨とするだけで終わってほしくないのではないか。課題とされたレポートへの回答を、1つの応用としてしつつ考えるのだが先生にレポートを提出して、頑張りを先生だけに認められるだけではやはりもったいないのではないか。大学で過去問が回るというのはよくある話だがもっと公正に、図書館がそういったものを集積するというのはどうだろうか。1つ注意点があるとすれば、図書館は登録された利用者だけが使うということである。一般のネットのように、どこの誰だか分からないということはない。これは大事なことである。ネットでは犯罪が多発している。最後にもう1点だけある。本を廃棄するとき、普通は、これまでその本を読んだ方の思いや、本がどれだけ参考にされたか、また、これから参考にされるか、ということとは責任者には分からない。"付随するデータ"があれば、廃棄の基準にできる。

図書館で本に下される評価

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

図書館を訪れる方は、図書館のように膨大な量の本を備える場所でもまた100年単位の時間の経過で、どんな本が人気があったのか？現代におすすめされるか？本1冊1冊への評価を、最初は分からないう問題がある。(図書館を訪れる方を無知であると仮定することを許してほしい)
(本に詳しい方は図書館で困らないだけのことである)
(提案を弱者の側に立ってのものとさせてほしい)

10年、100年という時間幅で
図書館がすすめる本とそれに関連する情報をつねに提示するというのはどうか。

アイデア

世界的な名著というような、よく知られたものでは意味がない。
評価基準はたくさんある。

- ・ 図書館の関係者のおすすめ
 - ・ 市民の方のおすすめ
 - ・ 大学の講義で先生がすすめている(多分野におよぶ)(どこの大学のシラバスのどの先生のどの講義の参考図書か？来館者は知りたいたいはずである)(重複する講義群でもいい)
 - ・ 経済的によく売れた(関連するメディアも含めてである(本を原作とする映画とか))
 - ・ 新聞の書評で書かれた(来館者はその書評も合わせて読みたいはずである)
 - ・ 何かの賞を受賞した(毎年さまざまなものがある)
 - ・ テレビ番組で紹介された(さまざまランキングがある)
- (こういったランキング同士の行ったり来たりも考えると、本を評価するということは意外に複雑である)
- ・ 本に関連する分野の企業が、将来的に読者と仕事をしたいと青田買いのようなことを考えている(プロگرامミングの本に対してのICT企業といった具合)

...
もしも、こうした評価を図書館で集約できたとすると、2つ考えられる。
1つ目は、来館者が迷うことなく本へ触れることができるようになることである。
子供たちには、是非、自分たちの将来を見越して本を選んでほしいと個人的には思う。
(おすすめは、あくまで、おすすめなので、無視されてもいいのであるが。)
2つ目は、本を評価する方々が、本を評価するとき、図書館でどう評価されるかということに気づいて過去の評価を参考にすると、社会の常識を持っていけないかということである。
つまり、数多ある評価への評価を、図書館が、基準となって与えるということである。
もちろん、本への評価は、その1冊に属するものではなく
その1冊を読む多くの方々にそれぞれにあるものである。
このことも含めて、本1冊1冊に評価を与えてほしい。
図書館の関係者だけでなく、市民1人ひとりのマンパワーが必要であるのならば協力すればいいことではないだろうか。

100年単位の時間についても考えたい。
子供たちに本と場所だけ残せばいいのだろうか？
その本がどう読まれたかも合わせて残したいと思わないだろうか。
こうしたことを考えるとき
現在の経済活動とくに広告、宣伝といったものは
毎年、1年限りの、即時性のあるものばかりで
少々、理想的で壮大であってしまふこれらの考えと合わない。
時間の進みが、社会よりもゆっくりにある(気がする)図書館だからこそできることである。
(誰でも売り上げを出して生きていかなければならないから大変であることは分かる。)
(子供たちに本をまっさらな気持ちで読んでほしいという方もいるだろう。
また、そうしたい子供もいるだろう。
そういう方々は、考えているような図書館のおすすめを利用しなければいけないだけである。)

図書館で借りて読んだ本の内容のコピーと"検索"

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

本を読んで消化した内容は、読書の後、いつ活用されるか誰にも分からない。一方で、一般的に、私たちは何かを知りたくなったら、それをネットで検索する。同じように、読んだ本の内容についても、いつでも"検索"のようなことができたら便利である。そして、自分自身のための"検索"で終わってもいいのだが、自分自身の読書体験が誰かのためになるという理想を考えると、いいだろう。

アイデア

図書館で本を借りて読み、読み終わったとしたら、その本の内容の電子化されたデータをローカルにコピーして保存させてもらうことを許すというのはどうか?という提案である。本を買って自身の所有物としていることが、"検索"できる条件か?というのは、ここで考えたい論点の1つである。人間1人が静かに本1冊を読んだら、当たり前前の構図である。買った本と借りた本にどれだけの違いがあるのだろうか?どんな曲解がありえるか?である。貸し出し先の読者が貧困に苦しむ家庭だったらどうだろうか?利害関係者は「コピーは不正だからやめろ。」と言うだろうか?言えないだろう。本に対して対価を払える方は払う、払えない方は払えなくなったら払うという着地点になるだろうか?購入者がPCに本のデータを残し、サイバー犯罪の被害に遭い、本のデータが流出してしまった、違法コピーのきっかけになってしまった、やはり貧困が不正の理由の1つになっている、としたらどうだろうか?本の著者など利害関係者は各人の事情にいちいち関与してはならないという考えは普通である。また、関与したくても本のような大量の物資、情報では対応は不可能である。ここまで考えただけで、読者の側の読書に対する状態の条件も、著者の側の対価を得る環境の条件も、はつきりしたものはないと分かる。

法律の安定や、サイバー犯罪の安定があつてから、「こうなった。守れ。」と言われてから、対応について善処する、という姿勢はどうだろうか?着地点になるだろうか?それが許されるなら、借りた本についても、「いつか払えるようになったら本を買うから。」と言って、自身のローカルにコピーをとることも許されるだろう。

しかし、すぐ分かるのは、そんな人間ばかりになったら、利害関係者が手にするはずだったお金が少なくなってしまうということである。書く側のモチベーションが下がって、出版不況どころか、執筆不況になったら、絶望の世界である。一方で、買った本の"検索"は自由、借りた本は自力で覚えるしかない、となると、経済的に恵まれている方と、図書館で本を借りるような方とで

どんな差がついてしまうのだろうか?これは想像できる。

そこで、特定のアプリケーションで管理された状態で、自由を制限されてなら、借りて読んだ本の内容のローカルでのコピーを許す、としてほしいと私は考える。

読者は上記のような、いつか善処する姿勢を、もちろんとるべきである。

利害関係者にとっては、後日お金を要求する根拠にもなる。

図書館の利用者は所在がはつきりしている。登録するからである。

図書館が信頼を担保するというのでは、過剰な待遇という気もする。

本のローカルでのコピーが許されるとして、さらに、それらを他人が"検索"可能にするというのはどうか。誰か、ある本を読んで内容を知っているかという人間関係がはつきりする。

最初は匿名でネットへ公開しておけばよい。読書体験のある方と、まだその本を読んでない方とが次第に人間関係をつくっていきけるようになるのは理想的である。

現在のネットは犯罪も多発している。ネットと図書館は全然違う。

図書館はたどっていけば、どの誰がどんな本を借りたか、ということが分かるようになっている。

一般の読者とは異なり、図書館経由の読者は登録をするので、ある程度の責任をこれから取る準備ができる。

読者の側が匿名を強く守って、まだ本を読んでない方へ何か助言することも考えられる。

図書館の場合は、(ここで考える機能がネット上に実現してもいいのであるが)

本景に生きる市民の誰かが、助言を受けける方と市民同士で、ある程度の責任を負っているのである。

図書館という公正な場であるから、一般の無責任なネットとは違ったことができると、もう一度だけ強調したい。

データコピーという未知のものに対する、ICTを基本とした柔軟な対応の提案

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

私は、成熟した社会とは混雑を回避できる社会であると考えている。図書館での混雑と言えば、1つには、貸し出しに人氣が集中することがある。ここで、図書館で、本が電子データ化されたもの(電子書籍と呼ぼう)が扱われていると考えるとほし。そうなると、もう、無限とも錯覚するほど、コピーできるので、図書館で利用者に電子書籍を貸し出すことが混雑なくできる。しかし、どういうとき、どれだけ、コピーすることが許されるのか? 誰がコピーを許可するのか? 誰によってコピーがなされるのか? いつコピーを消すのか? 疑問はたくさん出てくる。私は、誰がコピーを許可するのか? について考えた。考えた結果、著者、出版社などの既存の利害関係者だけでなく、第三者である図書館が、コピーを許可してもいいのではないかと考えるに至った。しかし、その結論ではあるが、方法が分かりきらない。考えたところまでを述べる。

アイデア

誰がコピーを許可するか? である。著者である。出版社である。生産に関わる方々が、第1に権利を持つべきである。これは普通である。はたまた、読者である。これはないか。消費者は、読ませてもらう立場で、生産者より立場が低いと考えるべきだろうか。ここで、考えてみると、本に関わる方々は、書く方、読む方、の2者だけではない。本をすすめる方、読ませる方も大事である。本を読ませる方がコピーを許可されると考えてみる。(本を客観的に捉えられるのは活用の現場ではないか。)例えば、学校の先生である。先生は教育に責任を持つのだが、コピーするとしたら、まず、教育の結果を前提にするのではないか。著者や出版社の利害を考えるかどうか。人間は教育の結果に向き合うとき、相等に敵しいことを自身に課すのではないか。失敗できないとか。保護者は何とつかどうか。子供たちが社会に出たときはどうか。一方で、もしかすると、「教育のためならば、コピーをとって構いません。」という、著者の方もいるかもしれない。

こういったことを考えるにつけ、ならば、著者が(出版社など生産者が)、第三者にコピーの新設の許可制を任せ、どういう条件でなら、第三者は、現場の方(学校の先生など)にコピーを許せるか? という問題に向き合うとき、出現した考え、意見を、積極的に、片っぱしから収集していくという対応策が考えられる。図書館の出版である。最終的に、できれば、網羅的に条件をまとめて明文化できれば理想的である。足りないのは、読者、著者などのすべての利害関係者の柔軟な姿勢と経験である。電子書籍というものは最近でてきたものである。情報のコピーの特性で、急に、すべてのICT利用者が読者になれる可能性があるがでてきた。急に、著者、出版社などの利害関係者が関知できない不正の横行の可能性もでてきた。混乱するのは当たり前である。コッコツと、法律の材料を集めていけばいいのではないか。電子書籍は大量の物資、情報で、個別対応は不可能だ、と決めつける前に、ICTのチカラを借りて、対応を始めた人間の勝ちだろうと思う。ICTを利用すると決めつけるのは、コピー許可のケースすべてを覚えきれない、など、最初は単純な理由による。例えば、ふたてに分かれてケースを収集して(3人でも4人でも何人でもよい)、持ち寄って突き合わせるときに、「これとこれは似てる、1つカテゴリーを作ろう。」という具合に進める。そのとき、ICTがどう使われるかというと、マジである。マッチングである。著者の側の条件だけでなく、読者の側からの希望を集めてもよいだろう。例えば、1回のコピー先確認で、クラス50人まで希望、それならOKと決まったとか、無制限にコピーしても、売上が1000万円以上保証されるとなり、学校50校100クラス3000冊以上協力すれば少し安くなるとか、なんか数字のある集め方である。逆に言うと、ICTをうまく使えるような、条件の、工夫された収集方法を考えることが、創造的で刺激的な問題である。以下、項目を挙げる。

事象(貧困のある地域では、4人で1冊の教科書を使っている等。)、理由(教育のため等。)、対象人数(1クラス50人まで等。)、お金(コピーを無制限に許したとしても、売上が1000万円以上はある等。)、時間の終わりのほう(コロナ禍で実感するように、突然、いつ、時間の連続性が重要になるか分からない。許可する人間を誰に引き継ぐか等。また、プログラムで処理するなら、責任者を誰に引き継ぐか等。)、政治、宗教、信条など繊細な事柄(筆者は詳しくくない。繊細だから、聞けない、書けないという矛盾もある。)、禁止する行為(ネットへのアップ等。)、戦争でいがみ合うなど敵対勢力があるか、ある場合どうするか(公正な議論は全世界で歓迎したい等。)、哲学、人生哲学、流儀(頑固なこだわりがあるか等。公開できる範囲で。)、土地々々の文化、伝統、風習にどう対応するか(現地では、本(電子書籍含む)が高価である、安価である等。)、情報流出(小説のあらすじに対する姿勢等。技術書で技術が漏洩すると困る等。困るでは済まない機密情報の場合等。)(こんなことまで考えるのは、原子力発電のために技術は継承しなければならず、しかしして、核開発はできればいいほうがいいと、そういう事情は数多く考えられるため。)、緊急(自然災害などもしもの場合どうするか等。)、アイデンティティー(自国・地域の人々を優先して、他国・地域の方々へは提供の優先を下げるというのは、普通の感覚だと思われるが、哲学的によくないのであるか?)、紹介(書評を書いてもらえれば等、条件を付けるか。)、...少し考えただけで、条件について項目はたくさんある。

調査を進めて、項目が増えたときは、改めて(定期的にがよいだろうが)、著者など関係者に質問、調整する。とにかく、本(電子書籍含むすべての本)に関わる方々で、同意をつくるのである。(図書館の方々(第三者)が学校の先生などにコピーを許可するという発想は、著作権の考えに近いのかもしれない。法律はよく知らない。)

電子書籍のコピーについての、現在の経済とこれからの経済の捉え方

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

私は、成熟した社会とは混雑を回避できる社会であると考えている。図書館での混雑と言えば、1つには、貸し出しに人気が集中することがある。ここで、図書館で、本が電子データ化されたものが扱われていると考えるとほしい。以下では電子書籍という。そうなると、もう、無限とも錯覚するほど、電子書籍をコピーできるので、図書館で利用者に電子書籍のコピーを貸し出すことが混雑なくできる。しかし、どういうとき、どれだけ、コピーすることが許されるのか？誰がコピーを許可するのか？いつコピーを消すのか？疑問はたくさん出てくる。電子的なコピーの登場で、電子書籍の生産(再生産)、流通、消費は、紙の本のそれらとは、まったく違ったものとなってゆくと予想される。生産者である著者や、出版社などの既存の利害関係者は、また図書館は経済的な、新しい仕組みを考え、つくり、運用しなければならなくなる。利用者にとつての読書体験は、図書館、書店、オンライン通販などの間で、相違点が曖昧になるといえるべきである。考えて、私が見つかったことは、電子書籍の流通のある現在の経済と、図書館での電子書籍の貸し出しのある、これからの経済と、両方をどう捉えればいいのかである。コピーについて、URLファイルリングで使われる、ホワイトリスト方式、ブラックリスト方式という考え方を応用して考えた。

アイデア

まず、ホワイトリスト方式で考える。無制限のコピーは悪という前提がある。一般的に、漫画について、違法コピーの不正が議論されている。本全般についても同様に考えられる。前提は妥当である。どういうとき、どれだけコピーが許されるのか？である。適当に具体例を挙げるが、教育現場で、先生と学生がコピーを必要とする、という場合があるかもしれない。著者、出版社の側も、教育のためなら、と条件付きでコピーを許可するかもしれない。

まずコピー禁止。1回のコピー先確認がクラス50人までなら、逐一確認で許可の場合あり。以上。

というように"ホワイトリスト方式"を進めるとどうなるかである。このようにしていったら、だんだんと、許可(ホワイトリスト)を増やしてゆく方針が1つ考えられる。次に、ブラックリスト方式で考える。人々に経済的な恩恵を行き渡らせるなら、無制限のコピーは善という前提も持てる。

まずコピーOK。ただし、閲覧は、できるだけ、指定の特定のアプリケーションを使ってだけで、もらえるところから、できるだけお金を回収します。違法コピーは不正、禁止。

これは現在の、実際の経済ではないだろうか。こっこのほうがお金が集まる。でも、これこれは禁止と、あとで禁止(ブラックリスト)を増やしてゆくのはどうなんだろう。大きな考え、大きな話で、先が読めない。ホワイトリスト方式では人々に恩恵が行き渡るまでに時間、労力などがかかる。ブラックリスト方式ではグレーゾーンが出てくる。例えば、貧困でコピーを求めるとかである。しかし、グレーゾーンは多くはない。現行の経済は、上記のブラックリスト方式で進んでいて、これから先の経済は、特例を求める場合、合わせてホワイトリスト方式で進んでいけばいいということであろうか。これが私が見つかった、経済の捉え方である。

貧困の問題は少ない人数とは言えない。地域の問題ともいえない。日本でもある。すぐには解決できない問題である。現在の経済で安定している方々が、無視すればいいというわけではない。これからの経済を予想したとき、地球規模で貧困を包含していったほうが、経済的利益は増加するし、犯罪は減少するし、紛争は減少するし、といいことばかりだと私は思っている。ただし、最終的に地球規模でより平和になるようにと考えるにしても、これはあくまで、県立図書館に対する、電子書籍のコピーのある、経済の捉え方の提案である。

"追跡経済"を応用した"スタイル待ち"による図書の選別

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

図書に限らず、映画、テレビ番組、漫画、音楽、新聞記事、ネットニュースなど、思いつくだけでも様々な媒体があり、それぞれについて、1人の人間には一生かかっても見きれないほどの物量がある。情報爆発や情報オーバーロードと議論されることがある。Wikipedia[1]で調べたところ、"この用語と概念はインターネットの前身であるARPANETの創設より古くからあり、図書館情報学からの観点や心理学的現象としての観点がある。"とある。図書館では、インターネット出現以前から、情報の増加に対して、例えば、収集図書の選別を通して、マンパワーをさいてきたということであろうと推察する。図書館の現状維持に肯定的な視点が得られる。また、選別の労力への敬意があって当然である。

ここで、さらに合わせて"追跡経済"(後述)の考えを応用してもらえれば、図書館に残される図書はより選別しやすくなる。"追跡経済"の説明と、1つの応用である"スタイル待ち"の提案である。

アイデア

自作の"追跡経済"という考えは、一言で言えば、10年待つということである。流行を追わない。上記の媒体による表現は価値が劣化しないものもある。例えば、素晴らしい映画は10年20年くらいでは色褪せない。図書、音楽など、他も同様である。5年、10年と経って作品の評価が定まってから消費すれば、はずれがない消費行動となるだろう。"追跡経済"の利点である。5年待つのか、10年待つのか、細かいことは考えていない。他にも利点がある。現在コロナ禍である。医療関係者は現時点では忙しい。娯楽をゆっくり楽しむ暇がない。そうだった方々に、「ここ2,3年間の代表的な作品はこれこれです。落ち着いてからも楽しんでもらえます。」とすることができ。日本の経済の宣伝・広告はサイクルが速すぎるのではないかと個人的には思っている。作品をつくった方々が、関わった方々が、よりゆっくりペースで、経済的に安定することがよいのではないかと考えている次第である。

"追跡経済"の応用がある。"スタイル待ち"である。作品それぞれの寿命というものは分からない。そこで、10年経ったらどうなるかと"追跡"する。マーケティングの言葉で言うところのスタイルのパターンが現れるかどうかを待つ。(スタイルについてはWikipedia[2]の考えを使った。ただし、横軸は時間であるが、縦軸は売上高、利益ではなく作品の価値と考えている。)

一過性の流行で終わらない図書を価値あるものと評価する。図書館で収集する図書の選別に、これまでの基準に加えて、"スタイル待ち"を考慮してもらったらどうかという提案である。つまり、民間での、一般社会での、速い宣伝・広告のサイクルでの、雑多な、ある意味確実な、作品の淘汰を待つということである。残されていく図書は、より絞られることになる。学術書なら10年,20年待つなど条件は考えなければならぬ。

[1]<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8D%A8%E6%8C%81%E3%83%9C%E3%83%84%E3%83%80%E3%83%90%E3%83%87%E3%83%8A%E3%83%89%E3%83%88%E3%83%87%E3%83%86%E3%83%85%E3%83%84%E3%83%83%E3%83%82%E3%83%81%E3%83%80%E3%83%7F%E3%83%7E%E3%83%7D%E3%83%7C%E3%83%7B%E3%83%7A%E3%83%79%E3%83%78%E3%83%77%E3%83%76%E3%83%75%E3%83%74%E3%83%73%E3%83%72%E3%83%71%E3%83%70%E3%83%6F%E3%83%6E%E3%83%6D%E3%83%6C%E3%83%6B%E3%83%6A%E3%83%69%E3%83%68%E3%83%67%E3%83%66%E3%83%65%E3%83%64%E3%83%63%E3%83%62%E3%83%61%E3%83%60%E3%83%5F%E3%83%5E%E3%83%5D%E3%83%5C%E3%83%5B%E3%83%5A%E3%83%59%E3%83%58%E3%83%57%E3%83%56%E3%83%55%E3%83%54%E3%83%53%E3%83%52%E3%83%51%E3%83%50%E3%83%4F%E3%83%4E%E3%83%4D%E3%83%4C%E3%83%4B%E3%83%4A%E3%83%49%E3%83%48%E3%83%47%E3%83%46%E3%83%45%E3%83%44%E3%83%43%E3%83%42%E3%83%41%E3%83%40%E3%83%3F%E3%83%3E%E3%83%3D%E3%83%3C%E3%83%3B%E3%83%3A%E3%83%39%E3%83%38%E3%83%37%E3%83%36%E3%83%35%E3%83%34%E3%83%33%E3%83%32%E3%83%31%E3%83%30%E3%83%2F%E3%83%2E%E3%83%2D%E3%83%2C%E3%83%2B%E3%83%2A%E3%83%29%E3%83%28%E3%83%27%E3%83%26%E3%83%25%E3%83%24%E3%83%23%E3%83%22%E3%83%21%E3%83%20%E3%83%1F%E3%83%1E%E3%83%1D%E3%83%1C%E3%83%1B%E3%83%1A%E3%83%19%E3%83%18%E3%83%17%E3%83%16%E3%83%15%E3%83%14%E3%83%13%E3%83%12%E3%83%11%E3%83%10%E3%83%0F%E3%83%0E%E3%83%0D%E3%83%0C%E3%83%0B%E3%83%0A%E3%83%09%E3%83%08%E3%83%07%E3%83%06%E3%83%05%E3%83%04%E3%83%03%E3%83%02%E3%83%01%E3%83%00>
最終更新 2019年2月25日 (月) 17:36 (UTC)

[2]<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%84%E3%83%87%E3%83%8A%E3%83%89%E3%83%88%E3%83%87%E3%83%86%E3%83%85%E3%83%84%E3%83%83%E3%83%82%E3%83%81%E3%83%80%E3%83%7F%E3%83%7E%E3%83%7D%E3%83%7C%E3%83%7B%E3%83%7A%E3%83%79%E3%83%78%E3%83%77%E3%83%76%E3%83%75%E3%83%74%E3%83%73%E3%83%72%E3%83%71%E3%83%70%E3%83%6F%E3%83%6E%E3%83%6D%E3%83%6C%E3%83%6B%E3%83%6A%E3%83%69%E3%83%68%E3%83%67%E3%83%66%E3%83%65%E3%83%64%E3%83%63%E3%83%62%E3%83%61%E3%83%60%E3%83%5F%E3%83%5E%E3%83%5D%E3%83%5C%E3%83%5B%E3%83%5A%E3%83%59%E3%83%58%E3%83%57%E3%83%56%E3%83%55%E3%83%54%E3%83%53%E3%83%52%E3%83%51%E3%83%50%E3%83%4F%E3%83%4E%E3%83%4D%E3%83%4C%E3%83%4B%E3%83%4A%E3%83%49%E3%83%48%E3%83%47%E3%83%46%E3%83%45%E3%83%44%E3%83%43%E3%83%42%E3%83%41%E3%83%40%E3%83%3F%E3%83%3E%E3%83%3D%E3%83%3C%E3%83%3B%E3%83%3A%E3%83%39%E3%83%38%E3%83%37%E3%83%36%E3%83%35%E3%83%34%E3%83%33%E3%83%32%E3%83%31%E3%83%30%E3%83%2F%E3%83%2E%E3%83%2D%E3%83%2C%E3%83%2B%E3%83%2A%E3%83%29%E3%83%28%E3%83%27%E3%83%26%E3%83%25%E3%83%24%E3%83%23%E3%83%22%E3%83%21%E3%83%20%E3%83%1F%E3%83%1E%E3%83%1D%E3%83%1C%E3%83%1B%E3%83%1A%E3%83%19%E3%83%18%E3%83%17%E3%83%16%E3%83%15%E3%83%14%E3%83%13%E3%83%12%E3%83%11%E3%83%10%E3%83%0F%E3%83%0E%E3%83%0D%E3%83%0C%E3%83%0B%E3%83%0A%E3%83%09%E3%83%08%E3%83%07%E3%83%06%E3%83%05%E3%83%04%E3%83%03%E3%83%02%E3%83%01%E3%83%00>
最終更新 2020年9月5日 (土) 12:05 (UTC)

本の人気ランキング作成と選挙への投票行動の類推、そして導かれる"日本の平衡"

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

今後、日本では、政治への参加がより簡単になってゆくことが予想される。選挙で立候補者に投票するだとか、選択肢のある政策へのアンケート調査に回答するだとかである。その実現にICTが利用されるのだとしたら、投票行動やアンケートへの回答は抽象化される。順番を逆に考えれば、後々、政治のように厳しく責任が求められる分野でも利用できるように本の人気ランキングを素早く出力できるようなシステムを作ってしまうことが考えられる。野心的である。とにかく、対象が1つあって、大勢がその対象に対してなんか投票するようになることは共通なのである。もう1つ考えたいのは、投票行動は1人ひとり独立したものであって、投票結果は集団をつくるということである。投票行動のシステムとして、スマホから投票するとか自宅の居間でテレビ視聴のついでにリモコンから投票するとか簡単に思いつくが1人に1台を売るという経済の事情に、思いつきが影響を受けすぎてはいないだろうか?と思う。最後に合わせて考えるのは、人気ランキングや選挙のような競争に、前もってあるべき条件、また理想的な結果ともいえる、"日本の平衡"の概念である。最後に詳しく述べる。

アイデア

投票の対象になるもの(選択肢)をそのままプログラミングでのオブジェクトとすると集計のとき、日本1億人の桁の投票が集まるのだから、負荷が大きくなってしまおうと想像がつく。では、投票する個人が、どこに投票したかを記録し、個人々々を集計してゆくとすると日本1億人の桁の有権者を集計してゆき、やはり負荷が大きくなってしまおう。それに、個人のオブジェクトに個人情報が入ってしまおうとも考えられる。ここで、統計学の考えを応用して、毎回、ランダムにある程度の人数を選び投票結果がどうかを調べれば、全体を推定できるだろう。選挙の開票速報でも統計学の応用はなされているだろうから、そんなに外れた考えではない。さらに、投票結果が集団をつくるという考えについてだがこれについては生き物のようで、プログラミングで前もって準備しておくというようなことは、できなさそうである。それならば、動的にどうやって対応するかだ。具体的に、とある本の中での人気ランキングを考えてみる。料理レシピ本にしよう。投票結果が、選択肢順に、10人で1,2,1,0,1,1,...となつたとする。100人で1,20,10,50,3,...となつたとする。目標は1億人の桁の推定だ。よく分からない。私には限界である。ここで視点を変える。選挙の場合、できたグループが一緒に群れるということはないことがある。対立することもあるという点で、この動的対応に速さを要求する。少数派は他の多数派との協力を考えなければならぬ。少数派にとっては、自分たちが少数派になるかが最大の関心である。一般的には、どこが多数派になるかが関心の的だろう。多数派は大きく構えていければよい。ところが、料理本の人気ランキングでは、人々は人気がある本を知りたい。選挙を考えたり、料理本を考えたりで、類推がうまくできない。共通したことが1つ言える。"日本の平衡"の大事さである。

"日本の平衡"は1から100までを足すと合計は(1 + 100) * 100 / 2 = 5050という答えの考え方に似ている。1に大きい方から100を足す。2に大きい方から99を足す。...合計として同じ101が100組できる。(2重に足してからの半分を割る(これは余計である))次のような具体例もある。100人いる。4人の富豪と96人のホームレスである。平衡するように分けるには、例えば、富豪a+24人、富豪b+24人、富豪c+24人、富豪d+24人の4組となるだろう。3組に分けるのは難しい。2組に分けるには、富豪2人とホームレス48人ずつ同士でとできる。問題を言葉にするのも私には難しいのであるが、解法があれば、例えば、スポーツのチーム分けなどに応用できる。しかしながら、日本には、昔からあるような平衡のさせ方ではないだろうか。

選挙の場合、結果に"日本の平衡"があれば少数派はおそれる必要がない。大きな勢力に適当に組み込まれる。料理本人気ランキングの場合、不人気な本がかわいそうではないか。図書館に置かれるくらいなら何か特色はあるはずである。人気の本とセットにしてみる。

"日本の平衡"は、競争の条件のような、結果のような、まだ捉えきれない概念である。競争の結果がどうというよりも、競争が平和的に繰り返し続くには?と考えるほうが上位の哲学というものであろう。私はふとこんなことを考えてみた。本の人気ランキング作成のプログラムは、私には難しすぎて分からなかった。

電子書籍を大量にコピーして貸し出すときのシリアルナンバーによる管理

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

ICTを利用する。
電子データ化された書籍ならば、そのデータをコピーすることで
ICTの環境がある方の手元へは、何人でも書籍を届けることができる。
私は成熟した社会とは混雑を回避できる社会であると考える。
図書館での混雑と言えば、1つには、貸し出しに人気が集中することがある。
コピーができるならば、混雑を回避できるのではないかという提案である。

アイデア

人気があるときにはコピーを増やし、借りられない方が出ないようにする。
貸し出し希望が少ないときには増やしたコピーを減らし
図書館内の(どうにか管理している)余りを少なくする。
コピーの動的な増減である。
実現には例えば次のような方法がある。
紙の書籍Aが2冊あるとする。
貸し出し希望が15人であるときはどうするかである。
まず、希望者に、PC、タブレット、AIスピーカーに朗読してもらおうなど
なんでもいいので、書籍データを閲覧できる装置を用意してもらえるか尋ねる。
用意してもらえらるなら、装置への書籍データのコピーを許す。
これで貸し出しの代わりとしてもらう。
用意してもらえないときは紙の書籍Aを貸し出す。
2冊の紙の書籍Aが貸し出された後は
データを閲覧する装置を用意できる方以外には貸し出し不能となる。
15人の希望者の内、13人以上装置を用意してもらえらるなら貸し出しに不足はない。
15人の希望者の内、12人以下しか装置を用意してもらえないなら
1人以上貸し出し不能(返却待ち)が発生してしまう。
ポイントは、書籍そのものは有限の物資であるが
書籍データのコピーだけなら無限とも思えるほど多く用意できることである。
貸し出し不能を発生させないために
装置へのコピーを推奨、優遇するような制度を設けるべきである。
例えば、コピーの場合、返却期限を紙の書籍よりも長くするなどである。
技術的に、どうやってデータを保持し、コピーし、消去するのか?
1つのアイデアだが、使い捨てのシリアルナンバーによる管理がある。

紙の書籍Bが3冊あるとする。

最初は、まだ、書籍Bに対するシリアルナンバーは、紙の書籍、装置のすべてで使われていない状態である。
貸し出し希望を募る。

希望者が現れたら、はじめて新しいシリアルナンバーをふる。

紙でも電子データでも合わせて通してふる。

返却された場合は、紙の書籍にふられたもの、装置へのコピーでふられたもの、すべての場合でシリアルナンバーを消す。
返却を記録し、そのときのシリアルナンバーは以降で2度と使わない。

貸し出しの度にシリアルナンバーを1つ増やして使う。

返却の度にそのとき使われたシリアルナンバーを使い捨てにする。

図書館の側で、シリアルナンバー何番が、誰の手元で

どんな状態かを管理することがポイントである。

管理されているものと一致しないシリアルナンバーが出てきたら

違法コピーなどの不正を疑うことができる。

データの消去は、閲覧時に、オンラインで部分的にしかデータを渡さない等が考えられる。

最初から、貸し出し先のローカルにはデータを残さないのである。

これなら返却を待たずしてコピーを減らせる。

ここに書いたことが、どこかの特許等だった場合は、私の再発明であったことを認め

私は何も言っていないこととする。